

沖縄ん 建築紀伝

横断する眼差し

■ 9回 ■ 国場幸房(建築家)
沖縄県立公文書館でBCS賞を受賞

私の設計担当した主な仕事に、コンペで頂いた仕事で那覇市民体育館、琉銀健保会館、具志川市役所、沖縄県立公文書館、読谷文化センター等がある。その他に二、三の住宅と國場ビル、ムービーホテル、平戸観光ホテル、琉大キヤンパス基本計画、国吉フツションビル、勤労者いこいの村沖縄、宮古空港ターミナルビル、パレットくもじ、沖縄美ら海水族館、等多くの仕事を担当させてもらった。その中の幾つかの建築物は社会的な色々な賞をいただいた。その中でも公文書館で頂いたBCS賞は、全国的な大きな賞であり社会へ幾らかの恩返しが出来た様で嬉しかった。

この公文書館のコンペ要綱のひとつに「沖縄的なシンボルになる様な」とあったので、沖縄瓦屋根の建物を想定した。予期したように十四の応募案の過半数が瓦屋根の案であった。私の案は屋根を出るだけ威圧感の無いヒューマンなスケール感覚でとらえられる集落を思わせる

ように、屋根の連なりをイメージし造形表現とした。また私の好きな沖縄の昔からの建物である高倉の要素をイメージの中にとり入れた。保存庫の建物の外壁を太陽の直射熱を遮るスクリーンに沖縄の高倉の壁面によく使われる菱形の竹網を模してデザインしたプレキャストを施し、ベンチレーションの役割をもたせた。

また、切妻屋根の小口面に瓦屋根の厚みを感ぜさせる設計に苦労した。サービス導線は階別に分け、人々の導線の入り口を一般利用者と管理者を左右に完全に分離し、少々冒険をした。その間を風と明かりが通りぬけ、落ち着いた亜熱帯地域に相応しいアサギテラスになる快適な空間を設定した。幸いにも当選させて頂き、又、大きな賞まで頂いたので関係者皆で喜んで頂けるものと思っている。実施設計に至って、この建物はこれまで経験した物に比べ、少し予算も時間もゆとりがあった。又工事費の1%を芸術文化の要素を建物に加えるための予算が組まれた頃に、水族館の話が出てきた。

ていた。建築と美術のジャンルの融合性と緊張感を高めたかったこともあり、沖縄在住で酒の飲める条件に合う県立芸大の教授であられた大嶺實清氏を中心に和宇慶氏、上條氏も加わって共に仕事をする事が出来た。約束でもあった20回にわたる居酒屋での夜食と酒席で、楽しく愉快に建築論と芸術論を交わす事が出来た。そのことにより、現在の展示されている歴史に残る印鑑を模した焼き物や、ヒンプンを兼ねた彫刻や、小物の作品に、シルクで刷った琉球の古地図の作品等を実現化することが出来た。完成した建物が温かさと深みを加えて頂いたと感謝している。

少し残念なのは、公文書館が特殊な用途だけに訪れる人が少ないことである。時には、喫茶店か沖縄そば屋でも併設してあればと思ったりする。その後読谷文化センターの仕事が終わった頃に、水族館の話が出てきた。



ベンチレーションの役割を持たせた
プレキャストスクリーン



集落の屋根の連なりをイメージした屋根

本土復帰記念事業として沖縄海洋博が開催され、その中にその当時東洋一の沖縄水族館が著名建築家楨文彦氏の設計によって創られた。その後二〇年程すると日本国内の多くの所で巨大な水族館がブームの如く建設された大阪の海遊館や東京の葛西水族館をふくむ海ノ中道、名古屋、八景島水族館等である。当施設も沖縄総合事務局の夢多い企画のもとで計画された。それまでの資料によるとバブル崩壊で規模は縮小されたようだが、この企画への期待と重要性は大きかった。基本計画の段階でも少し参加させてもらっていたが、有りがたいことに実施の段階でこの仕事をプロポーザルコンペで国建が頂くようになり、喜びと大きな責務を感じながら私も設計に参加した。